

「学校と社会をつなぐ調査」 (大学4年時調査) 分析結果報告

「学校と社会をつなぐ調査」(通称:10年トランジション調査)は、2013年度に京都大学高等教育研究開発推進センターと河合塾が共催で開始した、高校生の成長を約10年間追跡調査するものである。2018年11～12月には「大学4年時調査」を実施した。高校

2年生から大学4年生にかけて、資質・能力がどの程度変化するのか、それらが学習やキャリア意識などどのように関連するのか、就職活動の結果とどのように関連しているのかを分析した内容をレポートする。

調査の概要

はじめに、「学校と社会をつなぐ調査」のこれまでの結果を振り返っておこう。本調査は、高校2年生から大学卒業3年後までの約10年間をかけて、6回の追跡調査を実施するものである。学校での学習や日常生活の過ごし方、キャリア意識が、大学での学びや社会に出てからの仕事や人生の過ごし方にどのような影響を及ぼすかを明らかにし、新しい時代における学校教育の役割と、学校と仕事・社会との接続についても明らかにするのが狙いだ。

今回の分析結果の主なポイントは、次の通りである。

- 高校2年時から大学4年時までの間で、資質・能力は、大きくは変化しない。
- 高校2年時の資質・能力が、大学生になってからの

「学習」や「キャリア意識」に影響を及ぼす。

- 大学生の「学習」と「キャリア意識」は、学生生活を通して大きくは変化しない。
- 大学生の「キャリア意識」は、就職活動において得られた内定が、第一志望の就職先であったかどうかに影響を及ぼす。

資質・能力の変化

高校2年時から大学4年時までの間で 資質・能力は大きくは変化しない

新学習指導要領では、資質・能力の3つの柱(①知識・技能、②思考力・判断力・表現力等、③学びに向かう力・人間性等)が強く打ち出されている。本調査では、これらの柱となる資質・能力として、「他者理解力」「計画実

Column 1

調査の概要

高校2年時調査

- ・期間等：2013年10～12月に学校、あるいはインターネットで実施。
- ・対象：全国計378校の高校2年生45,311名(男性21,238名、女性22,588名、不明1,485名)が回答。メールアドレスをウェブ上で登録し、継続調査を承諾した16,829名(回答者の37.1%)がその後の継続調査の対象者となった。

大学1年時調査

- ・期間等：2015年11～12月にウェブ上で実施。
- ・対象：継続調査を承諾したうちの35.3%にあたる、5,939名が回答。そのうち、4年制(あるいは6年制)大学へ現役で進学した4,751名のうち、4,677名(男性1,792名、女性2,850名、回答拒否等その他35名)が分析対象者。

大学2年時調査

- ・期間等：2016年11～12月にウェブ上で実施。
- ・対象：大学1年生で、現役で4年制(あるいは6年制)大学に進学し、調査に回答した3,586名(男性1,335名、女性2,226名、回答拒否等その他25名)が分析対象者。高2で継続調査を受諾した人21.3%に相当。

大学3年時調査

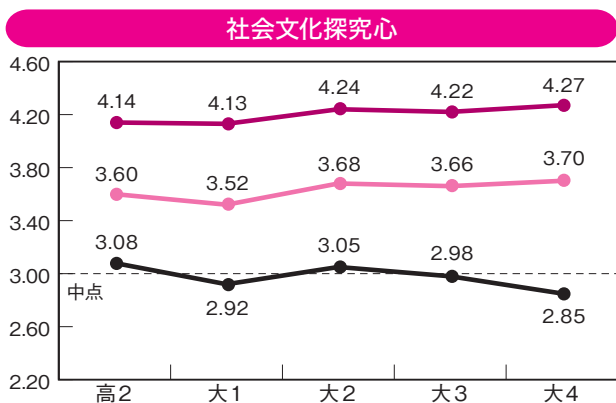
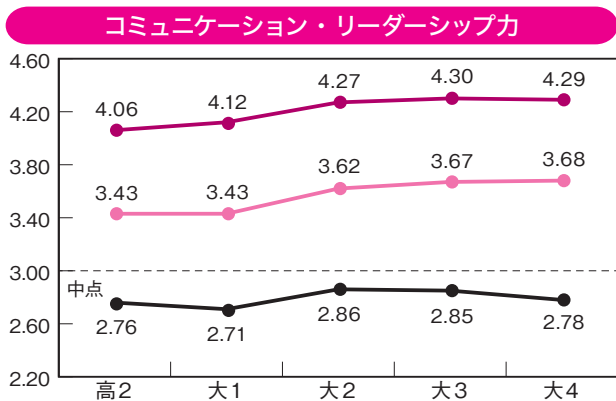
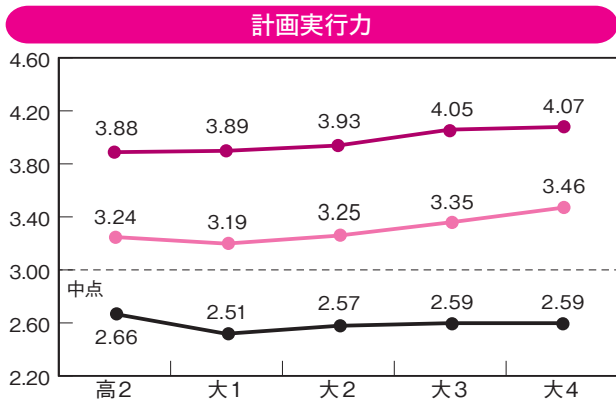
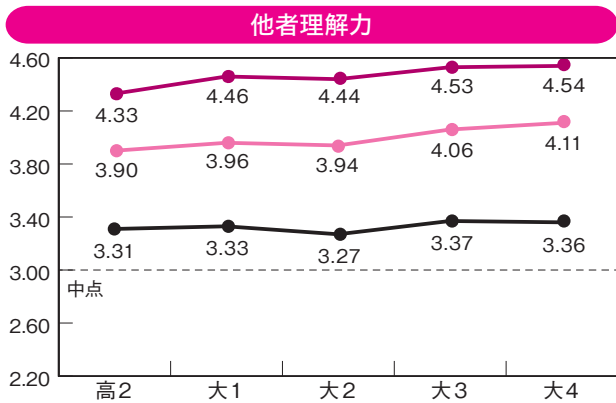
- ・期間等：2017年11～12月にウェブ上で実施。
- ・対象：調査に回答した3,239名(男性1,206名、女性2,014名、回答拒否等その他19名)が分析対象者。高2で継続調査を受諾した人19.2%に相当。

大学4年時調査

- ・期間等：2018年11～12月にウェブ上で実施。
- ・対象：調査に回答した2,742名(男性996名、女性1,731名、回答拒否等その他15名)が分析対象者。高2で継続調査を受諾した人16.3%に相当。

<グラフ1> 4つの資質・能力の変化

● 高クラス (N=1,434、31.0%) ● 中クラス (N=2,474、53.5%)
 ● 低クラス (N=719、15.5%) 全体 (Ns=4,627、100.0%)



行力」「コミュニケーション・リーダーシップ力」「社会文化探究心」の4つの資質・能力を取り上げている。大学4年時調査の結果から、まずこれらの4つの資質・能力がどのように変化するかを分析した。

高校2年時から大学4年時までの4つの資質・能力の得点を用いて、潜在クラス成長分析を行った。その結果、「高クラス」「中クラス」「低クラス」の3クラスが抽出された。<グラフ1>は、クラス別に、4つの資質・能力の得点を高校2年生から大学4年生までの5時点でプロットしたものである。

<グラフ1>を見ると、いずれの資質・能力も、高・中・低の3クラスは、それぞれ、高校2年時から大学4年時まで交わることなく推移している。ここから言えることは、高校2年時から大学4年時にかけて、生徒・学生の資質・能力は、クラスを移動するほどには大きく成長・変化しないということである。

クラス移動についてももう少し詳しく見てみよう。厳密に言うとは統計的な分析から離れるが、1人ひとりの得点を見て、低クラスから中または高クラスに大きく変化している人がいるかを検証した。資質・能力によって多少の幅はあるが、高校2年時と大学4年時を比べて、「大化け」^(注1)したのは0.3～1.4%程度であった。また、「大化け」も含めてクラス移動^(注2)した生徒・学生についても、9.1～17.4%にとどまった。いずれの資質・能

Column 2

資質・能力

「計画や目標を立てて日々を過ごすことができる」「社会の問題に対して分析したり考えたりすることができる」といった、資質・能力に関する18の設問について「どの程度身についたと感じるか」を5段階評価で聞いた。

本調査では、因子分析の結果を見て4因子で整理し、因子負荷の高い項目を用いて加算平均し、分析を行った結果、「他者理解力」「計画実行力」「コミュニケーション・リーダーシップ力」「社会文化探究心」の4つを抽出した。

「他者理解力」は異なる他者の考えに耳を傾けることができる力、「計画実行力」は目標を立て忍耐強く課題に取り組んでいく力、「コミュニケーション・リーダーシップ力」は他者と議論したり物事を協力して進めたりする力や人前で発表する力、「社会文化探究心」は社会の問題や文化などさまざまなことに関心を示していく態度などを示している。

(注1) 高校2年時に低クラスに属しており、大学4年時の得点が高クラスの平均点以上に変化する人。

(注2) 「大化け」に加えて、高校2年時に低（あるいは中）クラスに属しており、大学4年時の得点が中（あるいは高）クラスの平均点以上に変化する人。

力についても、約8割の生徒・学生がクラス移動をしておらず、幼少期からの積み上げの重要性を示唆している。

クラス移動は伴わないが 約7割の学生が大学入学後に成長を実感

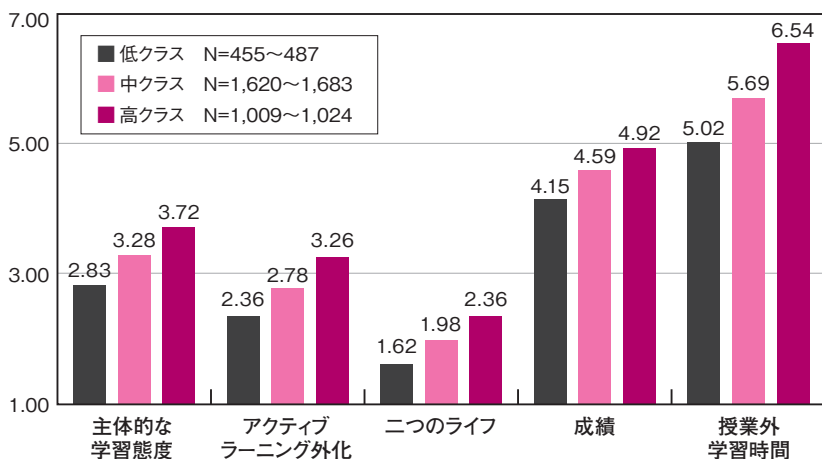
ただし、これは生徒・学生がこの時期にまったく成長・変化しないことを意味するものではない。特に、高クラス、中クラスのグラフの傾きは有意で正の値であり、クラス内での得点の上昇は統計的に認められる。大学3～4年生に対して実施した補完調査では、「あなたは大学に入ってから成長したと思うか」という質問に対して、約7割の学生が「成長した」と回答している。資質・能力の大きな発達は見られないとしても、「できないことができるようになった」などといった成長は、多くの学生が感じているのである。

「学習」と「キャリア意識」

資質・能力と大きく関わる 「学習」と「キャリア意識」

低・中・高の3つのクラスについて、大学における学

<グラフ2>大学生の学習状況・キャリア意識との関連(大学3年時)



Column 3

指標

主体的な学習態度

授業、レポートや課題へ取り組み姿勢について述べた9つの項目それぞれに対して、どの程度あてはまるか5段階で回答したものを得点化(他の指標も同様)。提示した項目は「授業には意欲的に取り組む」「課されたレポートや課題を少しでも良いものに仕上げようと努力する」「プレゼンテーションの際、何を質問されても大丈夫のように十分に調べる」など。

アクティブラーニング外化

文章や会話、発表などを通じて、自分の考えを示したり、意見を言ったりすることをいう。話し合いや発表のある授業へ参加する態度について述べた3つの項目それぞれに対して、どの程度あてはまるか4段階で回答したものを得点化。提示した項目は「議論や発表の中で自分の考えをはっきりと示す」「根拠を持ってクラスメイトに自分の意見を言う」「クラスメイトに自分の考えをうまく伝えられる方法を考える」の3項目。

成績

自己申告による回答を得点化。履修科目のうち「優(80点以上)」の成績の割合がどれくらいを占めるかを質問した。選択肢は、「80%以上」「60～80%未満」「40～60%未満」「20～40%未満」「20%以下」「その他(わからない、覚えていない、など)」。「その他」は分析には含めない。

授業外学習時間

「(大学生の)1週間の生活」の質問の中の「授業に関する勉強(予習や復習、宿題・課題など)をする」時間数。

二つのライフ

次の2つの質問への回答を合成した指標である。

質問1:

「自分の将来についての見通し(将来こういふふうでありたい)を持っているか」

回答:「持っている」「持っていない」の二者択一

質問2:

「その見通しの実現に向かって、今自分が何をすべきなのか分かっているか(理解)、またそれを実行しているか」

回答:「分かって(理解して)いて、実行している」「分かっているが、実行できていない」「まだ分からない」の三者択一

この2つの結果を合成し、下記の3つに再分類して得点化。

- ①「見通しあり・理解実行」
- ②「見通しあり・理解不実行」または「見通しあり・不理解」
- ③「見通しなし」

習状況やキャリア意識との関連を分析した。大学における学習状況を表す4つの指標「主体的な学習態度」「アクティブラーニング外化」「成績」「授業外学習時間」と、キャリア意識を表す指標「二つのライフ」について、それぞれ資質・能力の成長クラスとの関連を表したのが<グラフ2>である。

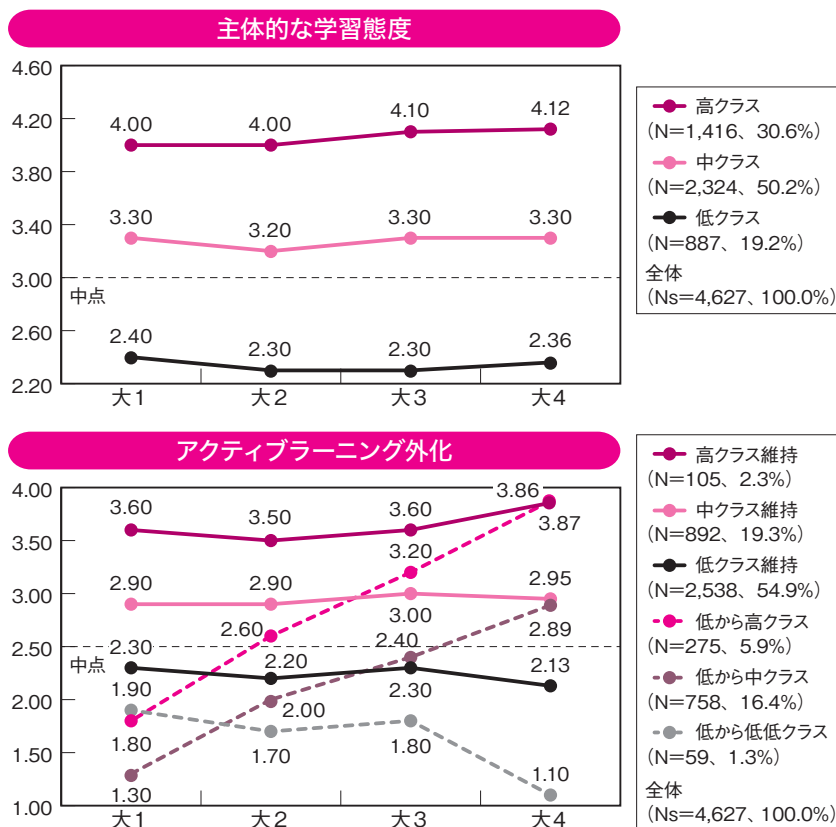
学習、キャリア意識ともすべての項目において、成長クラスが高いほど得点も高くなった。<グラフ2>は大学3年時の得点だが、大学1年時、大学4年時の得点においても同様の傾向が見られた。高校2年生からの資質・能力が、大学生になってからの学習やキャリア意識に大きな影響を及ぼすことを示唆している。

**大学生の「学習」と「キャリア意識」は
学生生活を通して大きくは変化しないが
成長やクラス移動をする指標もある**

大学生の学習状況やキャリア意識は、大学4年間を通してどのように変化するのか。

まず、学習状況については、「主体的な学習態度」と「アクティブラーニング外化」の2つの指標について潜在クラス成長分析を行った<グラフ3>。

<グラフ3>大学生の学習状況の変化



「主体的な学習態度」を見ると、資質・能力と同様に、「高クラス」「中クラス」「低クラス」の3グループが抽出された。この結果は、大学1年生から大学4年生にかけて、学生の主体的な学習態度がクラス移動するほどの成長・変化をしないことを示唆している。ただし、クラス内では得点の変化を見ることができる。中クラス、高クラスのグラフの傾きは、値は小さいが有意で正の値を示しており、特に高クラスの学生の得点は大きく上昇している。一方で、低クラスについては、グラフの傾きが有意に負の値を示しており、主体的な学習態度の得点が低下することを示唆している。

「アクティブラーニング外化」については、クラス移動が見られた。「高クラス」「中クラス」「低クラス」以外に、「低から高クラス」「低から中クラス」「低から低低クラス」というグループも抽出された。

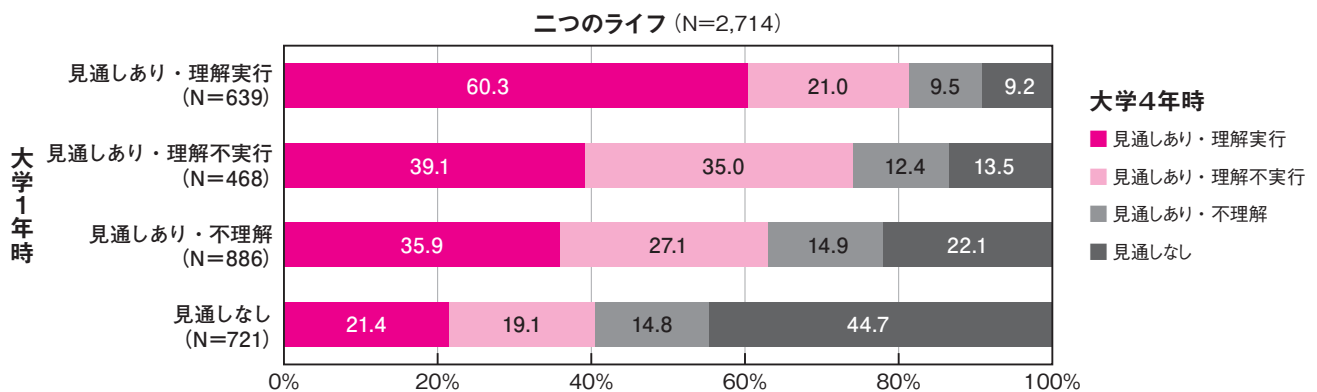
「低から高クラス」は5.9%と、わずかではあるが「大化け」する学生がいることが統計的に認められる。ただし、クラス移動をしたのはすべてをあわせても22.3%であり、大多数の学生はクラス移動をしない。

「キャリア意識」は、大学1年時と大学4年時それぞれの「二つのライフ」のステイタスを、クロス集計並びに χ^2 検定により分析した<グラフ4>。その結果、「見通しあり・不理解」を除き、大学1年時と大学4年時のステイタスが同じ学生が有意に多いことが明らかとなった。中でも、「見通しあり・理解実行」のままの学生(60.3%)と「見通しなし」のままの学生(44.7%)には、その傾向が強く見られた。この傾向は、学生が専攻する専門分野別に見ても大きな差は見られず、ほぼ同様の結果となった。キャリア意識は、大学生生活を通して変化が起きにくいことを示唆している。

**「二つのライフ」と内定を得られたかの関連は
統計的に認められないが
第一志望の就職先決定に
影響を及ぼす**

本調査の参加者が大学4年生となり、回答者のうち約7割の学生は就職活動

<グラフ4>二つのライフ (キャリア意識)



を行った。4つの資質・能力の成長クラス、大学1年時と4年時の「二つのライフ」を用いて、就職活動の結果や第一志望の就職先との関連を分析した。

「内定をとり、就職活動を終了した」学生の割合は、低クラス81.5%、中クラス86.7%、高クラス87.6%となった。高校2年生から大学4年生にかけての資質・能力の成長クラスと、就職活動の結果の間には、低クラスから高クラスの間で有意差は見られたものの、統計的には関連が認められない結果となった。

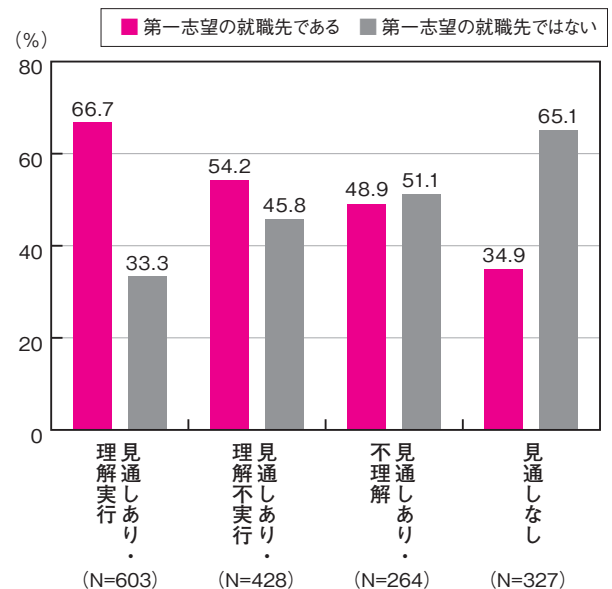
「二つのライフ」との関連も同様で、「二つのライフ」と就職活動の結果の間には、統計的には関連が認められないことが示された。また、第一志望の就職先との関連についても、クラス間で有意差は見られたものの、統計的には認められないと言える。

一方、「二つのライフ」との関連では、「見通しあり・理解実行」から「見通しなし」までの4つのステータスそれぞれについて、第一志望の就職先であったかどうかをグラフに表した。その結果、ステータス間で有意差が見られ、小程度の効果量も示された<グラフ5>。大学生のときに将来の見通しがあったか、それを理解し実現に向かって行動していたかが、就職活動において第一志望の就職先に決まるかどうかに影響を及ぼすことを示唆している。

高校段階までの間に 資質・能力の育成が必要

このように、高校2年時から大学4年時まで資質・能力が大きく変化しないという本調査結果は、高校段階までの間に、ある程度、児童・生徒の資質・能力を育てておかなければならないことを示唆している。特に、問題

<グラフ5>二つのライフと第一志望の就職先との関連 (大学4年時)



解決や対人関係・コミュニケーション、協働等の資質・能力の育成は、大学受験を理由におろそかにしてよいものではない。大学受験を乗り越えて志望する大学へ入学したとしても、高校までの間に議論をしない、協働をしない、新しい経験を積極的にしていないなど、資質・能力が十分に身につけていない生徒は、大学生になってもそれらの資質・能力を十分に発展させられない、と理解すべきだろう。

資質・能力はいつでも好きなときに発展させられるものではない。人はそれまで積み上げてきた知識や能力、経験等を基礎として発達するものである。そうした基本的な発達観を踏まえて、新学習指導要領に基づく教育を実践していく必要があるだろう。